

U・C・L・Aにおけるマールガ学会の報告

吉 津 宜 英

一 参加の機縁

今年（一九八八年）六月二十日から三十日まで一週間にわ

たってU・C・L・A (University of California, Los Angeles)

Jr.) 教授が今回私を招いてくれた人である。

で行われたマールガ (Marga. 学会名については後に述べる) 学会に参加したので、若干の報告をしたい。この学会に参加することになった機縁はやはり昭和六十（一九八五）年度の在外研究員として一年間アメリカに滞在したことによる。すでに論集第十七号に「アメリカ仏教学管見」として報告したが、その際、ロスアンジエ尔斯に近いアナハイム市で行なわれたアメリカ宗教学会 (A. A. R. 'American Academy of Religion) に参加した。ややなん、私がアメリカでの本拠地にしていたヴァージニア大 (University of Virginia) 宗教学部のポール・グローナー (Paul Groner) 教授と一緒に、ポールはこの学会で日本天台宗の良源（九一一一八五）について発表を

行つた。ポールは私に多くの仏教学者を紹介してくれたが、その中の一人、ロバート・バズウェル (Robert E. Buswell Jr.) 教授が今回私を招いてくれた人である。
それに、もっと直接の機縁は、私が昨年（一九八七年）ソウルで開かれた元暁学会に出席し、そこでロバートと再会したことによる。この元暁学会についてはすでに中外日報紙上などで大々的に報じられているので、改めてその説明はしないが、ただ一人アメリカから招かれたのがロバートであった。
その学会の何日目かの懇親会の席上で「来年六月U・C・L・Aで、マールガ学会を開くので参加してくれませんか」という話しかけがあった。私は六月というと大学の授業の前期の途中だけれどもという唯だ一つのひっかかりを感じつゝも、まあ何とか大学や学部の了解は取れるだろうと考えて、その場でOKしたのである。ただ私にはこれから約一年ぐらいかけてやるべき仕事があるので、特別なペーパーは用意でき

ないがと語らうと、ロバートはディスカッサント (discussant) としてでも良い旨を語ってくれ、私はそれなりに応じたが、これはともかく自分自身の英語力を認識していない、いわば暴挙とも言ふべきものであった。ロバートは私の英語力がどの程度かよく分かるのだから、とゆかくペーパーの用意を要求しても当然なのである。結論的には、後に述べるように今私の私にはピッタリの題目が用意され、とうてい不可能なディスカッサントの一人という席から発表者の方に移され、ペーパーの用意なしに発表するという、このような形式の学会では許されまじき態度が許され、何とか参加した痕跡を残すことことができたのは、ひとえにロバートの配慮によるものと私は心から感謝している。

II ロバート・バズウェルの紹介

ロバート・バズウェル教授 (Robert E. Buswell Jr.) は、この学会の主催者であるロバート・バズウェル教授 (Robert E. Buswell Jr.) のことを少し紹介したい。しかし、彼に履歴書を書いても授のことなどを少し紹介したい。しかし、彼に履歴書を書いてもらったわけでも、彼に個人的なことを伺つたわけでもなく、彼の著書及び彼が寄稿した本での著者紹介に拠るのであるから、きわめて簡略なものになることを、御本人にも、読者にも了解していただきたい。

彼は約十年間も韓国の大慶寺で、僧侶となつて坐禅修行をした。その間にも曹溪宗の開祖と称せられる普照大師知訥

(一一五八—一二一〇) の研究を続け、のちにカリフォルニア大バークレー校大学院に復帰してから、次のような本を出版した。

“The Korean Approach to Zen: The Collected Works of Chinul” University of Hawaii Press, 1983
本書は現存する知訥の著作をすべて英訳し、注を付し、そして冒頭に知訥の生涯と思想とを論じた、四六八頁もの大著である。私も、これは本書を読み破して、知訥の思想に迫つてみたいと考えている。

ついで、ロバートはバークレー校でランカスター (Lewis Lancaster) 教授の指導を受け、『金剛三昧經』の研究で博士号 (Ph. D.) を修得し、現在はU.C.L.Aの東アジア言語・文化学部 (Department of East Asian Languages and Cultures) の助教授 (Assistant Professor) であるが、すぐに準教授 (Associate Professor) に昇任するであろう。間もなく、彼の博士論文も公刊されるようであるし、また更に中国における⁽²⁾ 僧訥の研究⁽³⁾ が、また更に中国における偽經を中心とした編著も刊行されるようである。

さて、今回の学会での彼の発表は後ろみるようアビダルマ仏教に関するものであった。知訥の研究から出発し、主として禪の研究者として認めていた我々には一見不思議に感じられた。しかし、彼は今回の学会にも出席したバークレー校のアビダルマ仏教研究のジャイニ (Padmanabh S. Jaini) 教授

の薰陶を受けているのであり、さらに広い視野から中国や韓国の仏教を把握する意図をも含んでいることを考えれば何の不思議さもなく、むしろ、これから彼の幅広い活躍の一環として理解される。

今回の会議はだいぶ前から数人の学者で相談していたものようであるが、結局はロバートが中心になって推進する」とになつたとのことであった。側面からはアリゾナ大(University of Arizona)のジメロ(Robert Gimello)教授の協力をあおぎながら進めていつたが、ロバートの夫人、京子さんの助力も大きかつたと思われる。私自身も、U・C・L・A滞在中、京子さんには大変御世話になつたことを記し、ロバート紹介のしめくくりとしたい。

三 会議の日程と進行

以下で一応会議の日程と進行について表にして示そう。止泊したのはU・C・L・Aのゲスト・ハウス(Guest House)であり、会議はファカルティ・クラブ(Faculty Club)という教授用の大学会館といった建物で行なわれたので、我々はこれらの二つの建物の間を毎日往復したということになる。朝食と昼食はファカルティ・クラブの内で取り、夕食は大学町の内の中華料理店で全員で御馳走になつた。

六月二十五日(土) 到着

午後七時十九時 ゲスト・ハウスでレセプションとオリエンテーション

六月二十六日(日)

午前八時 朝食

“九時”南・東南アジア仏教

発表者 グレイス・バーフォード

ジョージ・ボンド

アラン・スポンバーグ

午後十二時半 昼食(Buffet Lunch)

“二時”南・東南アジア仏教(続)

発表者 コレット・コックス

ロバート・バズウェル

P・S・ジャイニ

午後六時 夕食

六月二十七日(月)

午前八時 朝食

“九時”中国仏教

発表者 ダン・ステイブンソン

吉津宜英

ピーター・グレンガリー

午後十一時半 昼食(Orang Beef)

〃 二時 “中国仏教(続)〃

発表者 韓基斗

アンナ・クライン

ドナルド・ロペツ

ジョン・マクレイ

ロバート・ジメロ

午後十二時半 昼食 (Vietnamese Beef)

午後二時 ディスカッサントによる総まとめと討論

午後六時 夕食

発表者 リー・イヤレー

六月二十八日 (火)

午前八時 朝食

“東北アジア仏教”

午後六時 おわかれディナー

六月三十日 (木)

午前八時 朝食、出発。

カール・ビールフェルト
ポール・グローナー

午後十二時半 昼食 (Pasta with chicken)

〃 二時 この日の午後はフリータイム。我々はゲッティ美術館に行き、その後でボーディ・トウリーという本屋に行き仏教書を買う。

午後七時 会議のメンバーの中、数人のものが前角博雄師主宰のロスアンジェルス禪センターに招待された。

六月二十九日 (水)

午前八時 朝食

“九時 “チベット仏教”

発表者 ジエフリー・ホプキンス

初めは出席を予定していた人が欠席したり、韓国の韓基斗先生のように帰国予定が早まつたために発表予定をくり上げたり、カール・ポッター教授の発表は内容がアビダルマでありながら、日本仏教の人々と一緒に発表するというような若干の変更とちぐはぐはあつたが、終始司会者をつとめたロバート・バズウェルの司令よろしきを得て、うまく進行したといえよう。

発表形式は、私を唯一の例外として全員の英文のページがメンバーに配布されているのであるから、発表者は十五分間を限つて、その要点を述べるだけである。そして、その発表についてディスカッサントを中心にして討論を行う。討論が活発かどうかで、その発表者の発表内容へのメンバーの評

題の説明と質疑応答を行なう。

四 縦報会議セッション

モノ、次に題の進行は如きかた形で各発表者の発表題目を
示す。その後ややその内容の発表の要点を簡単に記す。

June 26 (Sunday)

Grace Burford (Georgetown University). “Theravāda

Buddhist Soteriology and the Paradox of Desi-

re.”

George Bond (Northwestern University). “The Role
of Sila in the Magga According to the Thera-
vāda Buddhist Tradition”

Alan Sponberg (Stanford University). “Vision and
Cultivation on the Path to Liberation in Early
Buddhism.”

Collett Cox (University of Washington). “Attainment

Through Abandonment: the Sarvāstivādin Pa-
th of Removing Defilements.”

Robert Buswell (University of California, Los Ange-
les). “The Wholesome Roots and Their Eradi-

cation: A Descent to the Bedrock of Buddhist
Soteriology.”

Padmanabh S.Jaini (University of California, Berke-
ley). “On the Ignorance of the Arhat.”

June 27 (Monday)

Dan Stevenson (Butler University). “The Pathless
Path: Practical Considerations Behind Chih-i's

Systematization of the Six Identities.”

Yoshihide Yoshizuka (Komazawa University, Japan).

“The Mārga in Early Hua-yen Buddhism.”

Peter Gregory (University of Illinois).

“The Cosmogonic Basis of Tsung-mi's Theory
of the Path.”

Ki Doo Han (Wǒn'gwang University, Korea). “On
the Sudden Awakening of the Ch'an School in
the Dharma Teaching of the Mind Ground”
(Simji Pōbmun e nat'anan Sōn'ga ūi tono sasa-
ng).

John McRae (Cornell University) “Bracketing the
Emergence of Encounter Dialogue: the Trans-
formation of the Spiritual Path in Ch'an Bud-
dhism”

Robert Gimello (University of Arizona) "Wen-Tzu
Ch'an: Learning, Letters, and Meditation in
Northern Sung Ch'an"

and Indo-Tibetan Claims for Unmediated Cognition: The First and Sixth Bodhisattva Grounds.”

June 28 (Tuesday)

Karl Potter (University of Washington) "Abhidharma Philosophy in the Early Years"
Paul Groner (University of Virginia). "The Realization of Buddhahood with This Very Body (Sokushin Jōbutsu): Tendai Interpretations after Saichō (767-822)."

Carl Bielefeldt (Stanford University). "No-mind and Sudden Awakening: Thoughts on the Soteriology of a Kamakura Zen Text."

June 29 (Wednesday)

June 29 (Wednesday)

Donald Lopez (Middlebury College). “Paths Terminate and Interminate: Does Samsāra Ever End?”

Anne Klein (Stanford University / Rice University).
“Beyond Cultural Construction? Concentration

U・C・L・Aにおけるマールガ学会の報告（吉津）

以下、各発表者の発表の内容を紹介したいのであるが、正直にいって全部のペーパーを読了していないし、専門外といふこともあるので紹介の仕方にかなりの濃淡の出ることを御理解いただきたい。また、この会議中、私の語学力の不足を補う助力をしてくれたポール・グローナーの意見もかなり加味されていることを申し添えておく。

ここで、改めて、この会議の名称についても考えておかなくてはならない。

“Buddhist Soteriology: The Mārga and Other App-

これが正式な名称であるが、*Soteriology* とは辞書によるとキリスト教神学の用語で、キリストによる救済の教理を説く救済論を言うようである。神を信奉しない宗教である仏教にふさわしい用語ではない。*Buddhist Soteriology* を仏教救済論と訳しても意味不明であろう。そこで、その二語でもつて解脱論ぐらいに了解するほかはない。そして、ヨロン以下 の「マールガと解脱への種々なる方法」という一種の副題は、まさに解脱論あるいは解脱道がこの学会の共通テーマではある。

二六三

ある」とを明示している。更に、この一文中の「マールガ」(道)を以て学会のニックネームとして、Marga Conferenceと呼ぶのである。このような共通テーマの下にインドから日本にわたる仏教の各種形態の中に、いかに解脱道が説かれているかを検討しあうのが、この学会の目的なのである。ただ、このような形で、マールガという言葉を仏教全体の解脱論にまで広げて使用することについての疑問は後に私の発表の項で再び考へることにしたい。

さて、それではバーフォード教授の論文から順次一わたり見てゆこう。本論文は仏陀の教説としては最も古いといわれているスッタニペータ所収のアッタカ・ヴァッガを分析したものである。彼女によるとアッタカ・ヴァッガには一方では無欲で、どんな特定の見解(ditthi)にも執着してはいけないと説かれながらも、他方では解脱への意欲と正しい見解の保持とが強調され、これらの二つの方向は一見両立しえないようと思えるという。次に彼女はアッタカ・ヴァッガの注釈書であるマハニッヂーと仏音のパラマッタ・ジョーティカーの該当箇所を検討し、原意よりも教団の要請に即した形で

仏陀とその教えが正しい見解の内容であり、それ以外の思想に心を奪われるべきではないといった方向で解釈されていることを示す。

次にボンド教授の発表はテーラヴァーダ仏教における戒の

役割を論じたものである。彼は上座部における戒の原意から説きおこし、十戒、五戒、十学處、さらに小戒・中戒・大戒など種々の戒相を示す。そして上座部では戒は決して予備的なものではなく、目的である解脱と一体化したところで把握されていると指摘する。最後の部分で、最近、上座部仏教の内にも革新運動が起り、彼らは本来在家が守るべき十学處を捨てて、出家用の十戒を守り、しかも在家ですら、この世で解脱できるはずだと主張していることを紹介し、このように戒をめぐって革新運動が起るところに上座部仏教の特色が存在すると述べている。

次にスポンバーグ教授に移ろう。彼は本来唯識の教学に詳しいが、今回は見道と修道という修行のあり方をめぐって、アビダルマから原始仏教にまでさかのぼり、さらに印度思想全体にまで言及する。神秘的(mystical)ともいわれる見道と、理性的(rational)とも称される修道とがアーガマの中でどのように思えるという。次に彼女はアッタカ・ヴァッガの注釈書ビダルマの中で結合されるに至った経緯をフラウワルナー(Erich Frauwallner)教授の説を批判しながら論ずる。

次にコックス教授であるが、彼女は京都に三年ぐらい滞在し、大谷大学の桜井建教授や龍谷大学の加藤宏道講師の指導を受けたということで、日本の関係論文も多く引用した。先ずアビダルマ仏教の目的を明らかにし、その目的に至るには

煩惱の断尽が不可欠であることから、アビダルマ（特に説一切有部）の煩惱論を詳論し、さらに断尽の様相に説き及ぶ。

次にバズウェル教授は断善根について論究した。その前提として、善根とは何かということが明らかにされ、説一切有部以外の学派の断善根と有部の断善根を分けて論究し、さらに断善根と一闡提 (icchantika)との関係に説き及んだ。一旦断善根になったとしても、続善根を実現すれば、それは阿羅漢よりもすぐれているということが指摘され、親鸞の悪人正機説を想起する。また結論的には、布施 (dāna) の意義を強調したが、きわめて教理的研究の中から、いともすなおにこのように言われてみると、現代的な「いかに仏教はあるべきか」という観点からも深く考えさせられた。

つづいてジャイニ教授に移ろう。彼は俱舍論冒頭の帰敬偈を取り上げ、仏陀の一切智者性と、アラカンの無知性とを論ずる。したがって、本発表もいわば煩惱論の範疇に属するが、自らジャイナ教徒でもある彼はジャイナ教の教理を引用し、仏教と対比させた。今回の学会は、のちのポッター教授を含めて、アビダルマの研究が多いわけであるが、ジャイニ教授の存在と彼の指摘は他の部会に無い良い意味での緊張感をアビダルマ部会に与えていた。

さて、第二日目はプログラム変更でこの日の発表となつた韓国の韓基斗教授の発表をも含めて、中国仏教部会と称して

もよいであろう。トップバッターはスティーブンソン教授である。彼は天台智顕の説く六即の意図を追究した。その前提として天台の行位としての五十二位の階位の成立を智顕の師である南岳慧思の著作にまでさかのぼつて検討する。その上で六即を論ずるが、彼は次第（漸）であると共に円融（頓）であるような六即のような修道論の形成は『摩訶止觀』卷二下の「淮河の北に大乗空を行ずる人有り」といわれたり、同じく卷五上に「闡証の禪師、誦文の法師の能く知る所に非ず」といわれるような一群の仏教者を批判的に意識して成しとげられたものではないかと問題提起する。

次は私の発表の番であるが、後に節を改めて論ずるので、グレゴリー教授に飛ぶことにする。実は私の発表はかなり彼を意識し、いわば彼の前座の役目を果したつもりである。彼の宗密研究はかなり長年に及び、それだけに深まっている。今回は、『禪源諸詮集都序』⁽⁴⁾の中にある鎌田茂雄先生が名づけたところの「悟りと迷いの図」を徹底的に分析した。彼は題目に Cosmogonic という難しい言葉を用いた。辞書によると Cosmogony とは「宇宙生成論」とかとあるが、もう一つ似たような言葉で Cosmology 「宇宙論」というのがあって、アメリカ人もよく区別できいいらしい。彼の発表の後では肝心な彼の内容の検討よりも、これらの二語をめぐる定義の仕合に終つたのは残念であったが、彼がもっと平易な題

名にしておけば良かつたのかもしない。ただ、ひょっとしたら、この宗密の発想を後の周敦頤の『太極図説』あたりと関連づける意味で、あえてこの題にしたのかもしない。

彼は冒頭で智儼と法藏と宗密の三者の教判について比較し、智儼は hermeneutical (解釈学的)、法藏は sectarian (宗派的) そして宗密は soteriological (解脱論的) と特色を述べた。これに対して、私は法藏への規定にはともかく同意するが、智儼をそのように規定することは保留したいと述べた。だいたい、解釈学という言葉が、私にはソテリオロジーと同じ程度にむつかしい。

さて、悟りと迷いの分析についていえば、彼の編著である『頓と漸』所収の彼の論文もすでに読んでおいたので、よく理解することができた。特に私がぼやくとした理解しか持つていなかつた解悟 (The enlightenment of initial insight) と証悟 (The enlightenment of complete realization)との区別については明確に教えてもらつた。すなわち宗密のいわゆる頓悟漸修の頓悟は解悟に始まつて証悟に極まるのである。そして、漸修によつてのみそれが可能となる。

これらの分析は単に『禪源諸詮集都序』のみによるのではなく、『円覺經大疏』や『原人論』とも一致する」とが確認され、さらに北宗禪や洪州宗への宗密の批判に際しては『裴休拾遺記』(中華伝心地禪門師資承襲圖) も援用される。このグ

レゴリー教授の研究によつて宗密教学の綱格はほぼ明らかにされたといってよいであろう。ただ、問題になる点はいくつか存在する。まず、宗密教学の全貌の解明ということになれば、やはり『円覺經道場修證儀』のような宗密の実践面の研究は無視できないだろうということである。次に宗密が正統と考へる荷澤宗の教えと神会自身の思想とを対峙させて、同異を検討してみる必要はあるだろう。また私は『華嚴禪の思想史的研究』の中で宗密を批判したわけであるが、私の研究を良く理解してくれているグレゴリー教授がこの批判の面についてどのように考えているのか伺いたいものである。いずれ宗密についての大著が公刊されると聞き及んでいるが、宗密という人物が仏教史を越えて、中国の宗教思想史の上からも大きな存在であるだけに、今私の指摘した一、二の点も考慮して、この際徹底的に総合的な研究を期待したい。以上、グレゴリー教授の所が大変に長くなつたが、学会の場で発言しようと考えていたことを、全く証文の出し遅れではあるが、ここに記しておく。

さて、二十七日午後の部会の第一発表者は韓国の円光大学の韓基斗教授であった。彼は達摩の「心地法門」と呼ばれるものを頓悟の内容と規定し、それが南宗禪の中いかに伝持されたかを示そうとした。宗密の頓悟漸修に対し、頓悟頓修こそが心地法門を言い表わすにはふさわしいと彼は最後に述べ

ている。

次にマクレイ教授に眼を轉じよう。彼は一昨年大著⁽⁶⁾を公刊して、初期禪 (Early Ch'an) の研究に一ぐわりつけたようだ。いれらは『大祖壇經』の研究と洪州禪 (馬祖あたりから始まる禪宗の動きを Classical Ch'an と称し、先程の Early Ch'an と区別する) の解明に向ふようである。今回の発表はその Classical Ch'an の本質に機縁問答 (encounter dialogue) を見なすとするのである。資料としては主として『祖堂集』を用い、『宝林伝』にも言及した。伝統仏教の修行は往往にして個人のレベルで行い、目的を成就しようとするが、禪宗では一対一の師弟の問答こそが修行になるのだという指摘である。修行に相手が必要であるという観点では、この指摘は先にみたバズウェル教授のダーナ (布施) の重視と通うところがある。私の「宗」の提示が禪宗の本質であるという立場からすれば個の宗旨と個の宗旨が出会い、そして問答によって自覚を深めてゆくということは当然であろうと思う。ただ問答が語録化して、文字が間に介在するようになると困難な事態も生じたことであろう。中国禪の真の成果と問題点を明らかにしてもらいたいと期待している。

次にジメロ教授に移ろう。彼はまず佛教一般に共通の一つのパラドックスを語る。すなわち、仏陀は一切は無常だと説いたが、その無常性を悟るために絶えざる修行が要請され、

ある学派では法は永遠だとも説くに至るのである。大乗佛教でも同様であつて、一切皆空と言いつつも、利他行とか仏陀の無量の功德は有として認められる。次に具体的に中国の禪宗の歴史の上でも同様のことが伺われるというのが今回の発表の後半部分である。つまり、不立文字を主張し、無一物を説く禪宗の中で、いかにして宋代に慧洪 (1071-1128) の『石門文字禪』に代表されるような文字を大切にし、文化を重んずる禪が出現したかということである。このようないわば文化禪のところで禪宗は儒学の人々とタイアップできる場があるのであるが、その思想的なベースになつてゐるのはやはり宗密に由来する禪と教の合一 (私の呼称では華嚴禪) にあるようである。ある夜のセッションの席上で、彼は永井政之助教授の名前に言及した。論文を読んでいるようだ。永井氏の「庶民」の立場からの禪宗のとらえなおしあつた視点に彼が注目するのであらうか。さらに、今回のペーパーでは石井修道教授の『宋代禪宗史の研究』にも注の中で言及していた。

第三日目は『東北アジア佛教部会』と銘打つてあり、それはどうでも韓国と日本の佛教とを含意するものであつたらしいが、東国大学の李箕永教授は欠席であり、韓基斗教授はすでに第二日目で発表を終了し、帰国されたので、日本佛教はグローナー教授とビールフェルト教授の二名だけとなつた。

その二人の前にポッター教授のアビダルマ研究の発表が急遽入ってきた。彼の発表は初期のアビダルマ思想の特に修道論を論究しようというものであったが、何か特定のテーマにしほられていなかつたので、やや散漫な印象を受けた。

さて、グローナー教授は今回最澄以降の日本天台宗の即身成仏義の変遷について詳細な報告をした。最澄自身の即身成仏義については最晩年の著作である『法華秀句』の中に「即身成仏化導勝」という一章があり、すでに彼はこれにもとづいて最澄の即身成仏義についての論文を書き、いすれ公刊される予定である。いずれにしても最澄の弟子たちからして大いに即身成仏に関心を持っていたという。これは明らかに空海の『即身成仏義』をはじめとする密教、つまり真言宗への対抗意識によるだろう。天台家の人々ははじめは『法華経』自体の中で「提婆達多品」に出る童女成仏をもって即身成仏の根拠にしていたが、次第に密教を取り入れ、いわゆる台密を形成することによって証明するようになった。その一つの高まりが『即身成仏義私記』を著わした安然（八四一一八八九？）であることが論究される。そして、そのような天台の密教化にプロテストし、天台本来の教理に復帰しようとした人として宝地房証真が位置づけられる。

さて、グローナー教授の研究も以前の良源についての発表や今回の発表を拝見すると、いよいよ本覚思想の問題をもか

らめて源信（九四二一一〇一七）の研究でまた大著を物される必要があるのではないかと思う。さらに、日本の真言宗の歴史的研究も必須の課題であろう。また、今回の発表に限らず、もうそろそろグローナー流の日本佛教史観なり、天台教義論なりが拝聴できてもよいのではないかという印象を持つが、いかがであろうか。

次にビールフェルト教授は円爾弁円（一一〇一一一八〇）の『坐禅論』を英訳し、その内容を分析した。問題意識としては道元の坐禅論あるいは『弁道話』あたりの坐禅觀と比較したいということが根底にある。今回は、特に無心（No-mind）という言葉に焦点をあて、その坐禅觀の頓悟性を論究した。ジャイニ教授は彼の発表に対し、no-mind よりも、no-minding と訳した方がニュアンスが出るのではないかと提案した。思想書の翻訳のむつかしさを示す一つの事例である。

さて、学術会議の日程としては最後の第四日はチベット仏教部会であったが、実はロペツ教授もクライン教授もヴァージニア大でホップキンス教授の教えを受けた人たちで、したがって三人共にジョンカペを始祖とあおぐゲルク派の教学を中心とした発表であった。まずホップキンス教授はアティーシヤ（九八二一一〇五四）の『菩提道灯論』に出る三類の機根を取り上げ、それら三類がいかに次第に高く位置づけられるかを

更にツォンカペやジャムヤンシーパなどの文献を援用して説明した。さらにルドルフ・オットーやコングなどの文献と比較して宗教経験の本質に迫ろうとしている。

次にロペツ教授も資料的にはツォンカペやジャムヤンシーパのものを用いると明言する。テーマは全体としては一乗と三乗の問題といえよう。まず煩惱論について声聞縁覚の一乗の断尽した煩惱と菩薩の煩惱との対処の仕方を検討し、次に一乗と三乗との論争を扱いつつ、アラカンは大乗に入れるかどうかを論ずる。

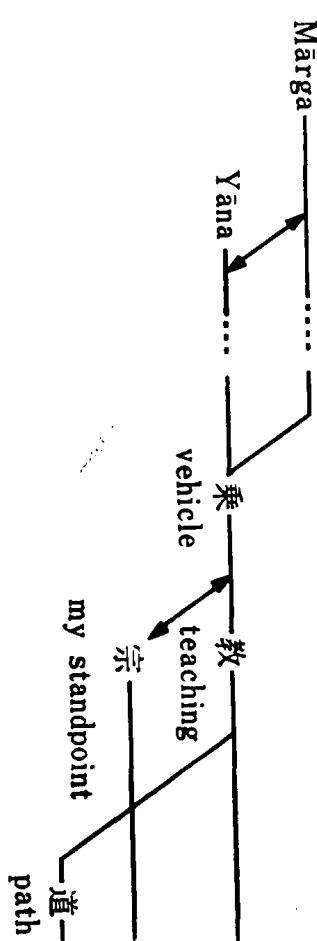
最後に、クライン教授は主としてチャンドラキールティの『入中論』と及びそれへのツォンカペたちの注釈を用いる。そして、彼女は空性を直接的に認識するこことを求めて、十地のうちで初地と第六地の分析を行う。

以上、まことに難駁で、簡略ではあるが発表者十八人の発表内容のポイントのみを紹介した。その他、ディスカッサンスとして参加したフォール (Bernard Faure, Stanford University) 教授やイヤリー (Lee Yearley, Stanford University) 教授もそれぞれの発表があり、また二十九日の午後のまとめの部会で、多くの発言をなしたが、私にはそれをまとめる力がないので残念ながら報告すらこなすことができない。

H 私の発表止り

私は与えられた題は「初期華厳教学における修道論」とでも和訳されそなうので、やうど直前に参加した仏教思想学会での発表を転用させていただいて智儀(六〇一—六八)と法藏(六四三—七一)の一乗義の解釈の差異とその差異が修道の面でどのように表われるかについて語るつもりであった。そして実際に発表の後半はそのような内容となつたのであるが、発表の前半部分は次の示すようなチャート(図)を提示して、印度佛教から中国佛教への大きな流れを考えてみた。

Indian Buddhism Chinese Buddhism



この図表は決してこの世の世の如きものではなく、最近一乗について、いろいろ考えてもるかといふのよつたのも伝えるかなあと私のゼミなどでは提示しておいたものである。それがこの学会でこの図を提示することになつたのは、この学会の個々の発表内容が前節で紹介したようなものであつたことに起因があるのである。すなわち、個々の発表内容はそれぞれに

詳細であり、すぐれたものであるが、どうも全体的な見通しといふか、位置づけが不明確だという印象が第一にあり、しかもチベット仏教の発表はあるとはいへ、インド大乗の般若や法華だって立派に“soteriological”ではないかという疑問が第二にわきあがり、そして第三に“Mārga Conference”というけれどもこのマールガという言葉で印度、中国、チベット、韓国、日本などの仏教の諸形態すべてを包括してよいのだろうかという問題意識が生れ、このチャートの提示とあいなつたわけである。

第三の問題意識からいえば magga, mārga は印度仏教一般に用いられるであろうし、中国では多く「道」と翻訳されているであろうし、また日本語でも「道」あるいは訓読で「みち」ともなる。これらの magga, mārga, 道、みちは簡単に等号で結ぶことのできない、それぞれの言語の背景を担っている。たとえば同じ漢字でも中国の思想史の文脈で道というのと、日本の茶道とか武道とかいう道とではかなりの違いがある。日本語ではむしろ「みち」と訓む方が何かしら倫理的なニュアンスを感じるのである。

そこで、マールガ会議と一般化されているけれども、もう少しマールガにこだわって、マールガの意味を特定してみる必要があるのでないかと考えたのである。その結果、やはりマールガは四聖諦の道諦 (mārgasatya) にみられるように

アーガマからアビダルマ仏教を代表する言葉と考えるべきではないかと思うのである。四諦の綱格を重視する仏教はマールガの仏教と呼んでよいのではないだろうか。

そのマールガ仏教に対して大乗仏教をヤーナ (yāna) 運動として把えることが可能であろう。マールガ仏教にプロテストして出てきた運動なのでチャートでは↑という印を用了。このヤーナ運動の形態は小品や大品の『般若經』の冒頭部分によく示されているが、後には『法華經』のように一乗あるいは一仏乗といった主張となる。このようにマールガとヤーナの対応としたからといって、従来のアビダルマと大乗との対応と同じではないかもいえるが、大乗といふとすぐりに小乗を連想し、批判という視点が出てくるので、一旦大乗の大を取り去ってヤーナの運動ということにしてみると、この運動の問題点がよりよく見えてくるのではないかとも考える。

実は中国仏教を見てゆく場合に、まずその前提として大乗は共通してヤーナの運動であったという確認が大切になってくる。先のチャートでいえばマールガの仏教もヤーナの運動も両方共に中国に入ってきたが、鳩摩羅什の活躍によって大乗がすぐれているという認識が一般化する。それならば大乗のみを仏説とし、小乗を非仏説として捨て去るのが印度仏教の流れからすれば当然であるが、大乗小乗とともに仏説という

ことになったところに中国仏教の出発点がある。先程、大乗をヤーナの運動という確認が必要であるといったのは、この中国仏教の出発点との対比からの発想である。すなわち、先にみたように印度ではマールガとヤーナとは対立関係にあつたのに、中国仏教では優劣関係として把握され、一切が乗（ヤーナ）として呼ばれる。小であれ、大であれ、仏説として平等に乗と称される。いわば中国仏教は印度の仏教を受け入れつつも、印度仏教の歴史を全く無視した、全く中国仏教独自の出発点から展開するのだということを言いたいのである。

中国仏教の流れの第二のポイントはこれら印度仏教の総括としての、また仏説として乗を教に組み替えることである。先のチャートの中で「乗一教」という部分がそれを示している。天台智顕の『法華玄義』における南三北七の批判と彼独自の教判の建立も、乗を教に組み替えてゆく壮大な試みであると思うが、実は法藏の『華嚴五教章』の「乘教開合第五」の一項も文字通り乗から教への証明を行っているのである。

『五教章』の「建立乗第一」とはまさに一切の仏説を別教一乗と同教一乗の下へ包摂しようとする。「分教開宗第四」では自からの教判としての五教十宗を示す。その後すぐに「乗教開合第五」では特に五教と諸乗との対配を行い、「教起前後第六」以降は完全に五教が中心となり、一乗三乗小乗など

は五教の体系を補うものにすぎなくなつてゆくのである。

このように乗から教へという証明の事例を法藏以外にももっと探す必要はあるが、一般に教判あるいは判教が中国仏教の特色の一つであるといわれるところに「教」として仏説を一括する姿勢があらわれているといえよう。では何故に教でなければならぬのか。それは儒教を国教にしたこともある中国の思想風土からの仏教への要請といえよう。

この「教」としての仏教の確立に対しプロテストしたのが「宗」を重んずる禅宗であるといふこと、またそれに付随する問題点などは『華嚴禪の思想史的研究』「第三章 達摩禪宗の成立と発達」すでに説明したので、ここでは省略する。先のチャートでは乗一教→宗として示した。

さらにチャートで教と宗とを結びつける形で「道」を示したのは、いうまでもなく宗密（七八〇—八四〇）から始まる一つの大きな流れである。私は仮に華嚴禪と命名したが、一般的には教禪一致説といわれているものである。これを道としたのは宗密が『原人論』で批判した韓愈（七六八—八二四）の『原道』と、宗密を批判して成立する朱熹（一一三〇—一二〇〇）などの道学と宗密とは、たしかに立場を異にするとはいえない、宗密が三教一致に通ずる立場を開く時、そこでは道を共にしうるということが認められるからである。宗密の用語としては性とか源とかいう立場であるが、まさにそのような言

葉はかえつて道という語義内容を明らかにする。このような道が「マールガ」とも異り、「みち」とも違うことは言うまでもない。⁽⁸⁾

このようなことを、もっと簡単に述べて、次に智儀と法藏との教学の違いをまたチャートにして示し、説明したのであるが、今はその部分は割愛したい。いざれ『仏教学』誌上にこの部分の詳論を載せるので、御批判いただきたい。私の発表の後半の部分については二、三の質問が出たが、前半の方についてはメンバーの誰からも何の質問も出ず、通訳してくれたポール・グローナーも不思議がっていた。ポールは殊の外、前半部分を推奨してくれ、ペーパーを用意しなかった私にも論文としての成果への路を開いてくれたことはありがたいことである。

六 まとめ

先に発表した十八人の内容のポイントのみを列記したのであるが、今回は主催者の意図なのか、あるいは自然にそうだったのかはわからないが、アビダルマ研究が多いのが眼につく。テーラヴァーダ仏教はヨーロッパで早くから成果が出ていたわけであるからアメリカの学者も取りつきやすいのであらうが、今回は説一切有部の研究が目立つた。アビダルマ仏教の研究はアメリカの人々の心を引きつける何かがあるので

あらうか。単純な疑問の一つである。

今の日本の仏教研究もそうであるが、アメリカの仏教研究は専門分野をしぶることを重んずる。これは大学院の制度とも、また大学への就職とも関連する。すなわち、大学に就職を保証されるためには少くとも一冊の本が出版されていることが必要であるが、そのためには大学院の時から専門をしぶって、それに向けて必死に論文を書いて、発表しなくてはならないわけである。普通の会社に就職していれば、四十才というものは安定したベテランというところであらうが、アメリカの大学制度では四十前後の人でも情容赦なく首にしてしまうことがある。だから懸命に論文を書いて、今回ののような学会に出席したりして実績を積み重ねるのである。今回の学会の参加者の多くもこれから一つの試練を経験する方々である。

それはともかく、研究だから分野を限定し、細密にやることは良いことではあるが、研究対象が宗教であるということは忘れてはいけないだろう。たしかに神を立てない宗教である仏教は、たとえ信じなくても研究することが容易である。これは仏教のありがたい所かもしれない。しかし、いざれの日にか仏教に対する自分の立場をはっきりしなくてはいけない時もくるのではないか。私の希望としては自分の立場をあらわにしつつも、しかも鋭く研究を進めてゆく人が出てほしいなと思うのである。たとえ仏教に対してポジティブである

うと、ネガティブであろうと、自分の立場をあらわにするところに、専門主義的研究ではなく、仏教全体を問うというか、仏教に関わる自己を問うという形で仏教的態度が現前してくるというか、いはば仏教に対する「学問」が成立するであろう。この学問の立場が、単なる自己陶酔と単なる客観的研究による業績主義を離れて、アメリカの社会に良いものをもたらすだろうと思う。

私は先に「アメリカ仏教学管見」（一九八六年）を書いた時と同様にアメリカの仏教研究の進展を確認したが、アメリカの友人が多くなるにつれて、つい研究レベルではなく本音のところでお互に仏教について語りたいという欲望が高まってくるのをおさえきれず、つい身の程知らずのことを書いてしまうのである。それでも今回も自分の研究生活のあり方を深く反省し、身心ともに疲れはてた旅ではあった。

注

- (一) ロウシーネの統轄翻訳図説 “The Chronology of Wonhyo’s Life and Works: Some Preliminary Considerations”

(二) “Buddhist Hermeneutics” (edited by Donald S. Lopez, Jr., Kuroda Institute, Studies in East Asian Buddhism 6, University of Hawaii Press, Honolulu, 1988)

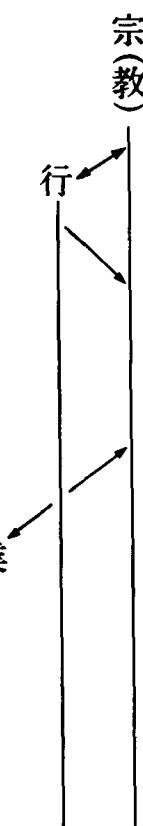
(三) “Ch’an Hermeneutics: A Korean View” (p. 231-p. 256)

(四) “The Northern School and the Formation of Early Ch’an Buddhism” (Kuroda Institute, Studies in East Asian Buddhism 3, University of Hawaii Press, Honolulu, 1986)

(五) “The Lotus Sūtra and Saicho’s Interpretation of Enlightenment Followed by Gradual Cultivation: Tsung-mi’s Analysis of Mind” (p. 279-p. 320)

the Realization of Buddhahood with this Very Body (sokushin jōbutsu)," in George and Willa Tanabe (eds.), *The Lotus Sūtra in Japanese Culture*, Honolulu: University of Hawaii Press, forthcoming

(8) 七月十一日 (火) 駒沢大学仏教経済研究所での学術の報告会でしたが、その場では日本仏教の流れのチャートを示したのや、いろいろ参考までに掲げてみよう。



日本仏教は中国仏教の宗も教も共に受け入れたが、どうもセクトとしての宗を正面にして、その内容としての教という冈式で、つまり宗(教)と云ふような形で出発し、その形は現在まで続いているといえよう。そして、鎌倉新仏教の一派専修、いわゆる選択主義はこの宗(教)のセクト主義を批判し、個々の行に徹したが、教団となるや、やはり宗(教)の公式になってしまった。一つの行のみといふことは純粹ではあるが、それを行じないゆるくの不寛容の態度、排除の意識があつて、どうしても閉鎖的社會を形成し、その面から宗(教)の中に融合してしまったのである。このグループ的閉鎖的な宗(教)に人々の仏業を重視する立場から再度プロテクトする必要である。人々のといふところには行の立場と共通性もあるが、不共なる個人の業が共なる社會に開かれ、人々が業を共有する形で生きてゆく。この場合の

業とは勿論身口意の三業であるが、この三業を具体的にどのように仏業で埋めてゆくかというところに各人の個性の發揮があり、その理想は単に個人レベルに止まらず、共業の場としての社会と一緒ににつらなるものでなければならぬ。その点では道元が『弁道話』の中で坐禅について「もし人一時なりといふと、三業に仏印を標し、三昧に端坐するとき、遍法界みな仏印となり、尽虚空といふとくわゆるとなる。」という三業の把握の仕方は正しいが、私は今や三昧に端坐しない時の三業のあり方を論じないではすまされない現実だらうと思う。だからこそ、この現今にあっても自分は道元と全く同じ立場なのだと言われる人を私は排除しようなどとは思わない。私は心からそのような人を尊敬したい。ただ私は道元ではなく、道元は私ではないのだといふ、よくあたりまえの事実の確認は重要であろう。これをいつも念じていないと、私たちは増上慢と同じ程に有害な卑下慢という病にとりつかれてしまうのである。道元から解脱することが道元を理解し、道元と心おきなく対話する一つの道のように思われる。